

## 福岡地方の二千年の医学の歴史

奥村 武

### 一、奴国時代の人体

博多の歴史は古く、天明四年、志賀島で金印『漢委奴国王』が出土したことで知られるように、奴国時代の人は『魏志倭人伝』に大人も小人も文身がみられるという。これを裏付するように、上籙子遺蹟から弥生時代の線刻板が出土し、描かれた人物は顔に文身をあらわしたものと思われる。

奴国人も含む北部九州の弥生時代の人類は、身長が低く顔のほりが深い丸顔で、縄文人は面長で身長が高い、大陸渡来系弥生人の二つに分類できる。

### 二、仏教伝来と伝染病の蔓延。国立病院『続明(命)院』の誕生

博多は古い歴史をもつ港湾都市で日本で最も大陸に近い関係上、日本の貿易港として古くから海外文化輸入の門戸として、西都として繁栄したが、それと同時に伝染病の蔓延には苦しんだ。一度に多数の人が高熱を出したり、下痢をしたり、発疹がでたりして死んでゆくことを天罰と信じ、『祈り』をする以外には知らなかった。

日本の西都である博多、太宰府は日本各地より仏教伝来によって唐人（大陸商人）や遣隋使、遣唐使の往来により、病人が多く発生し、旅の疲れと飢えのため死んでゆく者が少なくなかった。そのため太宰府政庁創設期の天平勝宝六年、観世音寺の附属施設として学校院の中に『医育制度』ができ、七十余年後に附属病院として『統明院』という日本最初の国立病院が開院したが、これは仏教伝来による宗教医学にすぎなかった。なお日本書紀には斉明天皇の三年の条に都貨羅國人が博多津に漂着した記録があり、時の朝廷に薬の製造法を伝来したという。

仏教伝来のころ、腸チフス、痘瘡、麻疹、赤痢、ジフテリアなどの伝染病が知られていた。なかでも痘瘡は博多での大流行を日本最初とし、その流行は悲惨を極め遂に天聰に達し、聖武天皇が天平五年に発布された。痘瘡の感染経路として『疫瘡初発起自聖武天皇御宇、鈴者遇蕃人繼此病称棠瘡、一児患之則一村流行也、猶之曳故名焉』『從藩船瘡到天下自是患其難者多』にみられるように、大陸の貿易船によって博多を通じて日本各地に伝染された。

当時、博多の迎賓館ともいうべき『鴻臚館』の遺構の中に古代のトイレ址が発見され、男性用、女性用と区別されていたことが明らかになり、便槽の中を分析し、当時の食物の種類、寄生虫卵などを知らることができた。

### 三、漢方医学からキリスト教医学へ

中国からの仏教伝来によって漢方医学が日本の医学の基本となったが、室町時代の末期よりキリスト教の伝来により豊後に府内病院ができ、病院は大友宗麟の保護をうけた。その頃の博多は大友氏、大内氏、少弐氏に分割統治されていた。宣教師も博多に移住し教会をつくり布教しながら博多の人達に治療を施した。刀や鉄砲による創傷に対する外科的治療法を博多の人に伝授されたことが『キリシタン通信』で知ることができる。

#### 四、和蘭医学の伝来

長崎の出島の商館医に師事し、和蘭医学が博多に伝来する。その長崎は、博多の末次興善が町を開き、その子平蔵が代々、町を支配した。博多商人の大賀、伊藤、西村らの豪商が長崎に支店をつくり、町名まで、興善町、筑前町、本博多町などを命名し、その上、博多の諏訪社や蛇踊りを移し、博多の遊里の主人は、丸山遊廓をつくり長崎は博多の出店という色彩が強くなり、徳川幕府の命によって筑前国の黒田氏と肥前の鍋島氏が交替で長崎の警備の任に当たったので博多が長崎を支配下におき、他藩よりもオランダ医学を早く導入するに有利な条件をもっていた。

オランダ商館医が居住する出島は、日本の二十五人の町人が出資し、扇嶼せんしよを築造した。出資者の一人、大賀九郎左エ門は博多の御朱印船貿易商人である。

オランダ医師より免許をうけた福岡藩の医師は他藩より多く居たとと思われるが、今日、資料をもって判明できる医師は上村道雲（寛永末年頃）、嵐山甫庵（寛文五年）、塚本道庵（寛文年間）、原三信（貞享三年）がいる。

#### 五、福岡藩における医師の地位。藩医と城内御番医

江戸時代、職業別階級がきびしいとき、東京の旧藩主黒田家に『如水公、長政公御書類控』があり、その中の十五冊目が浪人、医師の部で、医師は浪人と同格にみなされていた。

黒田藩文化十四年分限帳によると、二百石以上の医師の名を見ると、本科は鶴原雁林、鷹取養巴、村山玄育、鱸亥光、青木春沢、小野口山、篠田正貞、岸原養元、白水亥光、八田玉山、山鹿寿連。

小児は澄川元岱。外科は塚本道鷹。眼科は田原養全がみられる。

福岡藩には御典医はなく、藩医という。安政年間の藩医は御匙、御匙助、御外科、御鍼科、御口科、御眼科、御構女

中受持がある。御番医とは城内で急病発生時の当番医で、はじめは昼夜の勤務であったが、藩医の間で不満の声があった。藩医の当番医は鱸道育、上村尚庵、山鹿順貞、赤星玄貞、藤沢養庵、三宅益順、田中元立、鶴原道室、多久立節の九名であったが後に六名に減じ、更に勤務は夜間のみとなった。

## 六、死体の永久保存と死体解剖

死体が腐敗しないように人工的に保存することにエジプトのミイラの製法がある。福岡藩ではミイラの製法を知っていたものと思われる。福岡藩が長崎警護のとき、長崎よりミイラ一体を輸入したこともあり、貝原益軒の数ある著書の中の一つ『大和本草批正』でエジプトのミイラについて「その国の風俗、人死すれば胃腸を去りて、*ペルさま*にひたし、布にくるみて葬る也」と記している。これを立証するように、昭和二十五年福岡市の崇福寺の筑前国主黒田家墓所の改葬時、偶然にも第四代黒田綱政の墓所よりミイラがあらわれ自由に動く四肢、完全な身体、麻の着衣もそのまま、生ける姿であった。

『五龍日記』によると綱政は正徳元年四月十八日に死去したのであるが、故ありて二ヶ月間、病氣療養中と称して死を秘し、そのため藩医の鷹取養巴、篠田宗山、白水道沢、伊藤玄律らは家老隅田主膳の命により、綱政の遺体を安置した部屋に毎日参上、薬から食事まで運んで、この間に遺体の防腐作業が行われたものと思われる。

死体の永久保存（ミイラ製法）に必要な薬液は*ペルさま*（*バルサム液*）は東南アジアに産する植物からつくった防腐剤で、長崎を通じて博多商人がこれを手にするには容易であり、黒田綱政の完全な遺体の出現も納得できる。

死体解剖については明和八年三月、杉田玄白と共に小塚原刑場で死体解剖を実施し、『解体新書』を著した蘭学者前野良沢は福岡藩士谷口新介の子である。故ありて中津藩医前野東元に養われ、東元の嗣子となり、養家の伯父に当る宮田全沢により教育され蘭学者の道をすすんだ。

福岡地方で実施された死体解剖一覽

9	8	7	6	5	4	3	2	1		
県立福岡病院 の医師達	宮城犬三ら	西秋谷ら	大河内 和	初代 百武万里ら	酒井義篤ら	村上 玄水	伊勢田道益	前野良沢ら	解剖執刀者名	
一八八九年	一八八七年	一八八四年	一八七七年	一八四一年	一八三〇年	一八一七年	一七九七年	一七七一年	年代	
二代百武万里が吐血、急死のため自宅の座敷で病理解剖を実施す。医学雑誌『杏林の葉』創刊号に発表	野坂茂登の病理解剖実施 田川医師会々館前に解剖供養碑あり	四歳の中村栄太郎の病理解剖実施 北九州市小倉南区教泉寺そばに解剖供養碑あり	県立福岡病院内に二十坪の解剖室をつくる	記す 女性の行路病人死体を博多市小路上の自宅で解剖す。墓碑（博多・順心庵）に解剖を	筑後国久留米の人、解剖図を著わす	豊前国中津の人、解剖図を著わす	解体図記を著わす 墓碑（博多・順心庵）が解剖碑である	福岡藩士谷口新介の子 解体新書を著わす 良沢が福岡藩と関係があるのでこの一覽に加えた	摘要	

## 七、博多のメヂイカルセンター

博多の市小路・呉服町とその周辺は、桃山時代より御朱印船貿易商人をはじめとする貿易商人が多く集る貿易商人街として発展したが、徳川幕府の鎖国政策によつて貿易業は衰退し、それに入れ代るよう蘭方医、漢方医や本草学者、薬種商らの屋敷や店舗がならび、当時の博多のメヂイカルセンターの容貌を充分に備えていた。

この医師の町に居住する医師名を列举すると、児医で聖福寺塔頭継光庵址に子供病院をつくつた津田廓堂(意安)、その孫の元顧、その子元貫父子は博多の博物・地理誌である『石城志十二巻』を編録した。シーボルトの高弟である百武万里は蘭方産科医として開業し、天保十二年、自宅で武谷元立、武谷祐之、阪卷文栄、谷仲栄らと共に死体解剖を実施した。蘭方外科医の阪卷文慶・文栄父子、阪巻道慶、岡村良溪。百武の家に寄宿していた武谷元立。大坂の適塾の緒方洪庵の門人となつた武谷祐之、藤野良泰(蘭方産科医)、有吉周平。紀州の華岡青洲の門人となつた広田伝亮、津田仙山がいる。眼医の田原養全、漢方医の大賀寛庵ら三十余名の医師の名をあげる。薬種商として鞍屋(内海氏)、山口屋(白垣氏)、川口屋(波多江氏)らがあり、内海は町内に広大な御薬園所まで併設していた。

## 八、須恵村に眼医の町

福岡市近郊の須恵町に藩政時代より、高場(岡)と田原の眼医がいた。田原眼医は藩医で代々養伯・養全・養朴を名のり、診療を求めて患者が全国より集り、近くの農家は『眼療宿場』を許された。田原家の嘉永二年の『眼目療治帳』から患者の出身地について石滝豊美の報告によると全部で一〇二二人の名が記載されており、北より松前、箱館、越中、加賀、若狭から、また九州では肥前の四一三、筑後二四八、長門七三、杵岐、対馬からもあつた。その中の患者の一人に広瀬淡窓もいた。奥村玉蘭は自著『筑前名所図会』に須恵の患者は「三都八云に及ばず、東は奥州、西は薩摩より眼

療を乞ふ人当に数百千人来りて寓居す」と述べている。

須惠目薬は全国に販売され『高場順世秘伝目薬正明膏』と書かれた処方箋があり、明治になると精奇水・真珠水・博士目薬などの点眼水がつくられ、富山の薬売りと同様売薬人の行商より売り広められた。

須惠村には肥前有田と同様、藩寮の大きな磁器の産地で、医療用磁器の生産が盛んであった。乳鉢、乳棒、痰壺、蒸留器、耐熱用レトルト、るつぼなどがつくられた。磁器の染付の呉須は中国より輸入されていたが、蘭方産科医藤野良泰が姪浜に呉須の原石を発見し、磁器生産を授けた。

## 九、薬園

貝原益軒著『筑前国続風土記』には薬院村について「むかし異国より博多につきし時、薬草多く渡しを、此所に薬圃をかまへてうゑし所なる故、薬院といふ」、太宰府・鴻臚館時代より仏教伝来と共に薬草の移入によって薬園がつくられていたことが考えられ、薬院の地名の由来である。

福岡藩政時代、博多呉服町下に和漢薬種商、鞍屋の主人内海蘭溪は生薬学者である。高麗人參の栽培に成功し、自宅の町内に広大な薬園をつくり、薬草の研究にのり出した。各種薬用植物の効果を判定をするため、蘭法外科医阪巻文慶と薬用植物を記録するため写生をする画家中村伊八、藩より派遣された薬園奉行肥塚小八郎の三人を娘婿とし、蘭溪の生薬研究を授けた。蘭溪の御薬園所で高麗人參の栽培に成功した福岡藩は、大量生産を計る目的で、犬鳴谷に、後に住吉に開いた。藩主黒田斉清は蘭溪より教えを受け本草学者となり、城内と江戸屋敷に薬園を開き、蘭溪は病弱な藩主黒田斉隆のために、あらたに城内に薬園をつくった。蘭溪のライフワークとも云うべき著書に小野蘭山、上村米山の序文からなる『本草正画譜三十巻』と『御薬園、記録十三冊』がある。薬草は国内はもちろん長崎出島から阪巻文慶を通じて輸入された熱帯植物の生薬の栽培に温室までつくった。

筑前国の薬園

9	亀井少琴・雷首	今宿開業の地、好音亭・鳩居楼に薬園をつくる
8	奥村 玉蘭	太宰府学校院址に薬園と聖廟をつくる
7	上村 米山	自宅春吉寺町七番丁に薬園をつくる。内海蘭溪の門人
6	藩主 黒田 斉隆	病弱のため福岡城内に内海蘭溪に薬園をつくらせる
5	藩主 黒田 斉清	福岡城内本丸下と江戸屋敷に薬園をつくる 『本草啓蒙補遺』の著あり 宝暦二年鞍手郡、犬鳴谷に藩営の人参畠をつくる
4	内海 蘭溪	自宅の町内(博多呉服町下)に薬園をつくり高麗人参の栽培に成功す。後、福岡藩監理下となり御薬園所に薬園奉行を置く。『本草正画譜』三十巻を著わす 高麗人参の大量生産のため住吉に人参畠をつくる
3	津田 廓堂	聖福寺内に施薬園をつくる
2	貝原 益軒	『大和本草』の著あり
1	栄西 禅師	博多聖福寺を開山し、茶園を背振山と聖福寺に開く 『喫茶養生記』を著わす

## 十、頼山陽、博多に文化の華開く

文政元年四月、『日本外史』編纂中の頼山陽は西遊に際し、博多に滞在、店屋町の松永子登の家に宿泊す。その頃、山陽の学友、亀井南冥は文化十一年自宅出火の際に焼死した後であり、亀井昭陽が父に代り、奥村玉蘭、上村米山、大山忠平ら十余人が山陽を迎えた。

上村米山は内海蘭溪に生薬学を修得し、更に京都にて加賀川流の教えを受ける頃、山陽を知り交遊、山陽が博多滞在中、常に同行し、米山宅を訪れた山陽は、鶏煮の料理の接待をうけ、米山に漢詩を送った。

その頃の筑前の学問は亀井南冥の陽明学派の西学問所(甘棠館)と貝原益軒の流れをくむ竹田悟亭の朱子学派の東学問所(修猷館)の学者達の対立が激しく、寛政十年、甘棠館が焼失、廃館となったときであり、山陽の博多滞在は、朱子学派の学者達の非難の攻撃をうけ、山陽は博多に別れを告げ、太宰府を経て旅立ちした。山陽の博多滞在は二十数日であったが、山陽と交った学者達は後、それぞれ博多に文化の華を開いた。

## 十一、上方の相撲興行、博多場所に相撲掛医を常任させる

博多の町は昔から相撲が盛んなところ、各町こぞって力士を育て自慢し、櫛田神社の奉納相撲とした。上方の力士を呼び寄せた相撲興行もたびたびあったが、中でも享保十二年の博多大相撲は江戸大相撲そのものであったという。

興行場所は西門橋東側の畠地、二十五間四方の棧敷、勸進元は福岡藩。藩主黒田継高の後援もあり、大勢集る力士の興行中に負傷、病気に備え、相撲掛医者を常任させた。

本道(内科)は山崎口烈、松原道烈、外科は藤崎休節、針医は牛島口明らがその任に当った。

## 十二、緒方洪庵と福岡藩

### (一)、緒方家の発祥

緒方洪庵の遠祖は九州、日向国である。伝説に祖母<sup>そば</sup>嶽の大蛇が人に化け、堀川大納言の息女に通じ、一男子を生む。これを大神惟基という。代々相続き豊後国司、緒方三郎惟栄に至る。惟栄は大友氏の重臣となり佐伯郡の<sup>よがむ</sup>梶牟礼城主となるも大友氏のために自害したので惟常が城主となる。惟常の末裔が緒方洪庵である。惟常の兄、惟信はその子信好を連れて城を出奔し、大神姓に改め博多に移住し、更に大神を大賀姓に改め、信好の長子大賀九郎左衛門は御朱印船貿易商人となり、長崎に出島を築造した商人の一人である。

### (二)、緒方家と福岡藩との関係

天保十五年、武谷祐之が大坂の適塾に入門して以来、吉田梅仙、平野瓊蔵、篠田正貞、青木道琢、藤野良泰、塚本道甫ら多く医師が祐之に続いた。洪庵と福岡藩の医師達の交遊はむしろ洪庵自身が接近したものとと思われる。それは当時、長崎の出島に輸入される和蘭の医学書が長崎を警備する福岡藩には容易に入手できることであつた。また洪庵の嫡子平三が長崎留学に際し、親として子を思う一心に福岡の医師達を後見人にお願したことである。また、洪庵の父が大坂の筑前蔵屋敷に役職として在勤したことがあり、洪庵は歌人であり、福岡の歌聖、大隈言道が安政四年、大坂に移住、『飲水居』で洪庵も言道の門人の一人となつた。

### (三)、緒方洪庵より武谷諒亭に宛てた書簡二十五通

その内容は、『扶氏経験遺訓』の発刊、進呈に関するもの。コレラ大流行の対策と治療法、洪庵の著『虎狼痢治準』の進呈。和蘭医学書注文の依頼。藩主黒田長溥の姫の脳水腫や原田水仙の眼疾の治療法について。医療器械の一つ、胸聴器の使用法。薬剤、サントニン受取りの御礼。対馬にロシア軍艦が接岸、敵海軍の兵隊が上陸し、島民と衝突した事件

を心配していたこと等であった。

### 十三、福岡藩の医師、長崎留学

徳川幕府は海域防衛策として、安政元年、長崎に海軍と医学を伝習する海軍伝習所ができたころ、福岡城内の御殿の一室に化学分析研究所ともいふべき『舎密館』ができていた。長崎の海軍伝習所は小島療養所、更に精得館と変り、福岡藩から藩費を以て留学生を続々と送り、藩主黒田長溥は精得館の運営に財政的援助をした。

福岡藩の洋学振興政策として安政二年、古川俊平（写真）、長野円助（時計）、熊谷又七（測量）、前田凌海（舎密・写真）、藤野良泰（産科学・写真）、田原養伯（眼科学）、喜多村武蔵（西洋式軍事訓練・ラッパ）の七名が選抜され、その後三十余名が長崎に留学生として送られた。

長崎の鳴滝塾に文政十年、すでにシーボルトの門人として武谷元立、百武万里、有吉周平、原田種彦が入門し、他の和蘭医師に、青木興勝、阿部忠吉、弓場厚載、緒方春朔が師事する盛況であった。

安政三年、勝海舟が乗った幕府の軍艦が博多湾に入り投錨したので、藩主黒田長溥は乗員を箱崎の別荘に招待した。その乗員の中にポンペがいたので長溥は西洋医学校の必要性を知り、ポンペの教えを受けた。

慶応三年、長崎七夕祭のとき、長崎丸山遊里の道路上で、福岡藩の留学生が、英国水兵二人を殺傷する事件があり、これをもって留学生は全員引きあげ、福岡藩の長崎留学は幕を閉じた。福岡藩の医師は、長崎留学のみではなく、徳川幕府の国費を受けて西洋に留学するものもいた。その中の一人宗像郡の赤星見竜の子、研造は、慶応二年ドイツのハイデルベルヒ大学に入学し、帰国して明治六年、東京大学外科学教授となった。

#### 十四、福岡藩の精煉所と医学校『賛生館』

鹿児島藩の藩主島津重豪の九男が福岡藩の藩主黒田長溥で、鹿児島島の集成館ができる前に、博多には中島町の南、那珂川河畔に福岡藩の殖産研究所ともいふべき『福岡藩精煉所』がつくられ、大賀勝右エ門を主任として迎えた。鑄造、硝子製造、鍍金<sup>めっき</sup>、製薬、写真、陶磁器の研究、製造など分野を広げた。これだけの多くの研究、製造を福岡藩精煉所の狭い敷地の中ですることはできず、鑄造は土居町の磯野七平慶直の鑄造所、硝子製造は箱崎のガラス工場、陶磁器製造は、野間や須恵の窯場を、また写真術は河野禎造、古川俊平、藤野良泰が福岡城内の『舎密館』の既存の施設を使用した。鉄砲や刀鍛冶は児島伝平や信国又助がその任に当り、武谷祐之は製薬を担当し、肝油、サントニンの製造に成功した。

河野禎造は化学分析表とも云うべき『舎密便覧』と他に『農家備要』、『農業花暦』を著わし、安部竜平はシーボルトとの問答を『下問雑載』にまとめ、安部竜平、永井青涯共著『新字小識』、永井は更に正確な『万国図』を出版し、学問は世界に広げた。

#### 十五、福岡藩医学校『賛生館』の誕生

福岡藩に西洋医学校を設置する気運は、ポードインの助言を得て、藩主黒田長溥と武谷祐之は家老以下の当時の執政者に西洋式医学校の構想を説明したが、世界の事情に通ぜず、藩主、侍医達の反対にあい中断した。二年後、漢方医連中を代表し、河島養林が武谷に漢洋医学折衷の医学校を提案し、慶応三年春、土手の町堀端<sup>どてのちよう</sup>に開院『賛生館』と命名され、頭取に武谷祐之、漢方医を代表して漢方医官に河島養林、西洋医官に原田水仙、病院取締(病院長)に篠田正貞が勤めたが後任に河島養林となったが、廃藩となり財政の道をなくし、廃校同様となった時、塚本道甫は、福岡藩知事有栖川宮に賛生館の存続と西洋人医師の採用こそ王政御一新の精神であると口上書を提出したが実現しなかった。

その後、贊生館の医師、前田凌海、有吉周平、二代百武万里、吉富洞雲、河島養林、香江誠の六名は明治六年、修猷館医学所併置診療所を開いたが、経営困難となり、同七年県庁に医学校再開を建議したところ、福岡藩精煉所址の空屋を仮病舎とし、長崎病院から西川黙藏を招いて開院、その隣接地約二千坪に県立福岡医院を新築し、同十年六月、尾張国名古屋の藩医大河内存真の孫、東京大学卒業の大河内和を院長として迎えた。大河内によつて福岡にドイツ医学を最初に導入され開院した。この病院は同十二年、医学校を併置され、香江誠が校長となつたが、同十六年福岡甲種医学校附置乙種薬種学校は廃止され、同二十一年県立福岡病院として再出発し、薬学校の内海善兵衛は私立福岡薬学校を因幡町に新設開校した。

大河内の急逝により、その後を引き継いだ大森治豊は県立福岡病院の院長となり、千代の松原に広大な敷地を有する病院を新築して移転開院後、この病院を更に医科大学に昇格させるため、京都帝国大学の一分科として京都帝国大学福岡医科大学が誕生し、今日の九州大学医学部へと発展したのである。

(奥村内科医院)

# Medicine of the Fukuoka Area over the Last 2000 Years

Takeshi OKUMURA

The town of Hakata has prospered through being the nearest port in Japan to continental Asia.

However, trade ships visiting Hakata have unwittingly caused the introduction of contagious diseases to Japan.

The religions which trade introduced to Hakata brought with them the spread of new medical practices, notably Chinese medicine with Buddhism and Western medicine with Christianity.

Medical students who came from Hakata learned medicine from the Dutch at Dejima as well as in the town of Nagasaki which had been developed by Hakata merchants.

In the Dazaifu-Kourokan Era, a medical school and “Zokumyoin”—the first national hospital in Japan—were established.

Under the supervision of a Dutch doctor, a medical school called “Sanseikan” was founded by the Fukuoka clan.

A prefectural hospital was built in Fukuoka during the Meiji Era. This was influenced by German medicine and eventually grew to become the current Medical Faculty of Kyushu University.

(45)